

2014年8月17日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 10章 1～5節

説教：恥を受ける神

1 ダビデは家来を送った

1) 「恵みを尽くそう」

ここで登場してくるアモン人は、その祖先をたどっていくとアブラハムの甥であったロトにたどり着きます。ですから、アモン人とイスラエル人は、遠い親戚にあたることになります。住んでいたところもイスラエルのすぐ東隣です。しかし、長い年月が経つとすっかり他人のような関係になってしまい、サウルが王であったときは、何度も戦いが繰り返されていました。

ところがダビデが王となってからは、アモン人の王であるナハシュは格別にダビデに対して好意を持ち、親しい間柄になっていました。そのナハシュが亡くなりました。その知らせを聞いたビデはこう言います。2節。

「ナハシュの子ハヌンに真実を尽くそう。彼の父が私に真実を尽くしてくれたように。」

ここで「真実」と訳されていることばに注目します。もとの文章を見ると、ほかの箇所では「恵み」とも訳されることばが使われています。前回見た9章で、ダビデがヨナタンの子メフィボシュテにいろいろと親切な申し出をしている場面を見ました。なぜそうしたか、その理由は9章1節にあって、「私はヨナタンのために、その者に恵みを施したい」と言っています。

ヨナタンに施したのと同じように、ナハシュの子ハヌンにも神の恵みを施そうとする。つまりダビデは、神の恵みをイスラエルの内側にも外側に施したいと考えた。それで、ダビデは家来をハヌンの所に送り、丁寧にお

悔やみのことばを伝えようと思いました。

これを現代風に言い直せば、「弔問外交」ということです。有力な政治家の葬儀の場を借りて、これからの両国の関係について親交を深めていく。そんなチャンスです。ですから、葬儀に参列して終わりではありません。「あなたのお父様は私ダビデに対して大変親切にしてくれました。あなたが王となっても、この関係を今後ますます深めていきましょう。」ダビデは、こんなメッセージをハヌンに送ろうとしたのです。

2) 疑うアモン人

では、アモン人の新しい王となったハヌンはどのように応じたのでしょうか。3節。「アモン人のつかさたちは、彼らの主君ハヌンに言った。「ダビデがあなたの元に悔やみの使者をよこしたからといって、彼が父君を敬っているとでもお考えですか。この町を調べ、探り、くつがえすために、ダビデはあなたのところに家来をよこしたのではありませんか。」

この頃のダビデは、攻めて来る敵を次々とねじ伏せています。その軍事力をもって自分の国にも攻めてくるのではないか、そんなふうにダビデを警戒する雰囲気があったのは確かでしょう。ハヌンの家来たちが、いろいろと疑うのは無理もないことかもしれません。

どんな時代でも、戦争は攻撃目標を調べ上げることから始まります。町を調べるには門を通って入らなければなりません。門には検

問所が置かれ、怪しい者かどうかチェックされます。普段は入ることはむづかしい。ところが、王様の葬儀のために参りましたと言えば、堂々と町の中に入ることができます。そこから重要な軍事情報が敵に漏れる可能性があります。ハヌンの家来たちは、そのことを疑った訳です。

それでどうしたか。4節。「そこでハヌンはダビデの家来たちを捕らえ、彼らのひげを半分そり落とし、その衣を半分に切って尻のあたりまでにし、彼らを送り返した。」

確かにアモン人がダビデを警戒する理由はあったでしょう。だからと言って、こんな非常識なことをしてよいという理由にはなりません。先代の王様の葬儀のために、外交使節団が送られてきたなら丁重にお迎えして礼儀を尽くさなければならぬ。それが、どんな時代でも変わらない国際ルールです。そのルールを無視して、徹底的に侮辱して送り返した。これは、アモン人はイスラエルに対して宣戦布告したというメッセージに他なりません。

2 家来は恥を受けて送り返された

1) 都に帰ることができない

当時のイスラエルでは、男子はひげをたくわえ、きちんと手入れを行うことが礼儀とされていた。ひげをそることは、特別の事情がない限りやってはならないことだったそうです。それが半分だけそり落とされてしまったのですから、全部そり落とされるよりもっと屈辱的です。また、葬儀に出席するために着てきた礼服をみなに見ている前で半分に切られ、裸同然にさせられました。5節に、「この人たちが非常に恥じていたからである」とあります。服ならば着替え

ればよいかもしれません。けれどもひげはどうしようもありません。エルサレムに戻ろうにも、こんな姿では戻ることができません。

2) 迎えに人をやる

ダビデは事の次第を聞かされ、人を迎えにやり、こう伝えます。5節。「あなたがたのひげが伸びるまで、エリコにとどまり、それから帰りなさい。」ダビデの気持ちはどうだったのでしょうか。家来が受けた屈辱的な扱い、それをそのまま自分のことと受けとめます。自分が、恥をかかされたと感じています。家来たちがエルサレムには戻れないと言って落胆している気持ちがよくわかります。ですから人を迎えにやり、慰めのことばをかけました。「今はゆっくりと休みなさい。ひげが伸びて以前のような姿になったなら、そのとき帰って来てなさい。」

ダビデの態度をどう評価するのでしょうか。弔問外交が失敗に終わったのです。その結果、戦争が始まろうとしています。多くの人のいのちが失われることとなります。ただちに調査委員会が組まれ、どうしてこんなことになったのか、派遣された外交官をすぐに呼び戻し、責任を明らかにするべきではないか。政治や外交に通じている方なら、そんなふう

に思うでしょう。そんな常識をダビデは知らなかったといえるのでしょうか。いいえ。彼は非常にすぐれた政治家であり外交官でもありました。そのダビデが、これ以上問題を追及しようとしな

のです。苦しむ者のそばにかけ寄り、慰めのことばをかけ、休みなさいと声をかけてくれる。そんな神の姿がダビデのことばから見えてきます。

3 イエス・キリスト

1) 神は誰に恵みを与えるのか

さて、ここから神の救いについて考えていきます。

ダビデはなんと言ったか、2節をもう一度読みます。「ナハシュの子ハヌンに真実を尽くそう。彼の父が私に真実を尽くしてくれたように。」父親がダビデに恵みを施してくれたので、その子に神の恵みを施す。簡単に言えばそうなります。

考えてみるとおかしな話です。ハヌンはなにかよいことをしたのでしょうか。何もしていません。何もしていないのに、ただ父親が生前ダビデと親しくしていたからという理由で、ある日突然棚からぼた餅式に神の恵みとその子どもに降ってくる。それが神の恵みだと言っています。

神の恵みは誰に与えられるのでしょうか。よいことをした人とは書いていません。また反対に、悪いことをした人には与えないとも書いていない。私が何かをしたとかしなかった、そんな理由ではなく、もっと別の理由で神の恵み、すなわち救いが与えられると書かれています。

2) 恥を受けて追い返される

では、どんな理由で救われるのでしょうか。イエス・キリストを思い出してください。この方は私たちに恵みを施すために、やってこられました。私たちはこの方に何かよいことをしたのでしょうか。いいえ、逆でしょう。ひ

どいことをした。いいえ、私はしていない、と言うのでしょうか。私はあの十字架の周りにいなかった、と言いますか。確かにいなかったかもしれませんが。でも、あのとき人々はなんと叫びましたか。「十字架から降りて来て、自分を救ってみろ。」「今、十字架から降りてもらおうか。われわれは、それを見たら信じるから。」

人々は、恵みを施すために来られた方を十字架につけ、その周りに立ってあざ笑い、好き勝手なことを叫んでいました。その場にはいなかったかもしれないけれど、私たちも彼らと同じことをしていたのではないですか。神のひとり子である方が、身を低くされ、私たちと同じ姿になられ、貧しくなられたのを見て、ハヌンと同じように、人々が見ている前で侮辱を与え、足で蹴って追い出した。ここに書かれているハヌンは、私たちのことではないですか。その結果どうなったか。イエス・キリストが十字架で死なれました。私たちに代わってさばきを受けられました。

3) 契約のゆえに恵みが与えられる

十字架とはなんのでしょうか。神が私たちと新しい契約を結んでくださった、そのしるしです。神のひとり子が死なれたのは、あなたの罪の身代わりのためである。そのような契約が十字架に込められています。私たちが救われる理由は何か。この救いの契約を神ご自身が、私たちが生まれるはるか以前に結んでくださったから。

十字架の上から救いの手が差しのべられています。それでも「おまえはスパイだ」と言って払いのけますか。神が十字架につるされ、私の目の前で、はずかしめを受け、笑いものにされ、つばきをかけられたのに、それ

でも疑いますか。いったいなにを疑うのでしょうか。この方は裸にされたのです。なにかを隠していましたか。いのちを捨てられたのです。隠すものなどありません。全部見せてくれた。むしろ隠しているのはいったい誰ですか。私たちの方でしょう。私は神となんの関わりもない。そう言い張って、何かを隠している。なぜ隠そうとするのか。神に責められるのではないか。どこかで神を恐れているからです。でも先ほど見たとおりに、ダビデは失敗した人たちを責めなかったでしょう。かえって慰めのことばをかけた。神とはそのような方なのです。だから恐れる必要はない。「私はあなたを十字架に追いやったひどい人間なのです。」そのように告白する者に、神の恵みが豊かに注がれて参ります。